



公開講座
「小学校英語教育の
進め方」

担当者: 兼重 昇

kanesige@naruto-u.ac.jp

担当箇所概要

■ 小学校英語教育の現状と問題点

■ 配布資料

- 平成15年度文部科学省調査「小学校英語活動の実施状況」
- 「小学校での英語学習活動 カリキュラム開発の視点から」『中国地区英語教育学会紀要』No.32: pp.147-155
- 「小学校英語教育のあり方 カリキュラム開発に関して」『鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)』第19巻 pp.193-199
- 「小学校英語教育は、「英語の教育」か「英語教授」か」『教育のあゆみ「小学校の英語教育のあり方を考える」』兵庫教育大学附属小学校教育研究会 第29号 pp22-27
- 「小学校における英語活動の実施状況 徳島県の事例をもとにして」

そもそも「小学校の英語」とは？

- 「総合的な学習の時間」における「国際理解教育の一環として」行われる「外国語会話等」としての「英語」
 - >>FLEX ((Foreign Language in Experience)
 - 一般の公立小学校で、学習指導要領内で実施
- 「英語科」としての「英語」
 - >>FLES (Foreign Language in Elementary School)
 - 私立学校、研究開発校や特区で実施
- イマージョンプログラムにおける教室言語・メディアとしての「英語」
 - >>Immersion Program
 - 私立学校など

小学校英語活動の実施状況

■ 文部科学省調査(平成15年度実績)

□ 「英語活動を実施した学校」

- 全22,526校のうち, 19,897校(88.3%)

□ 実施頻度・時間数

- 年間12回以下の実施, すなわち月に1度程度

□ 形態

- 全体的に学級担任が中心となって英語活動を指導
- ALT(英語指導助手)や英語に堪能な地域人材の活用が70%以上

□ 利用時間枠

表1. 公立小学校の「総合的な学習の時間」における外国語会話の実施状況

	平成14年度実施率	平成15年度実施率
第3学年	51.3%	48.8%
第4学年	52.3%	49.6%
第5学年	53.6%	51.5%
第6学年	56.1%	54.1%

表2 . 英語活動年間平均実施時間数

	平成14年度 実施時間数	平成15年度 実施時間数
第3学年	11.4時間	11.4時間
第4学年	11.3時間	11.0時間
第5学年	11.7時間	11.6時間
第6学年	12.1時間	12.0時間

表3 . 英語活動の主たる指導者別時間数 (平成15年度)

	学級担任	英語指導 担当教員	中・高英 語教員	特別非常 勤講師	その他 (校長, 教頭等)
第1学年	85.1%	4.0%	0.5%	7.9%	2.5%
第2学年	85.2%	4.0%	0.6%	7.7%	2.5%
第3学年	86.7%	4.4%	0.6%	7.8%	0.5%
第4学年	86.3%	4.7%	0.6%	7.9%	0.5%
第5学年	85.8%	4.7%	0.7%	8.3%	0.5%
第6学年	85.7%	4.8%	0.9%	8.1%	0.5%

表4 . ALTや英語に堪能な地域人材の活用時間数(全時間数に占める割合:平成15年度)

	ALT	地域人材
第1学年	72.8%	12.4%
第2学年	74.3%	12.4%
第3学年	60.3%	11.8%
第4学年	59.6%	12.2%
第5学年	61.0%	12.2%
第6学年	60.9%	12.1%

小学校英語活動に関する問題

- 教科化の問題
- リソースの不足
 - 人的リソースの不足
 - 教員の問題: ALT, HRT, JTE, GT
 - 物的リソースの不足
 - 教材、教具、教科書？
 - カリキュラム etc.
- (幼)・小・中・(高)・(大)一環した英語教育

教科化の問題

- もし、教科が始まるとして可能な最短デッドラインは？
 - 「教科化を検討する小委員会を中教審の教科課程部会」(平成15年度内に報告を提出)
 - 「学習指導要領」の加筆(～平成16年度8月)
 - 教科書の作成(～平成17年8月)
 - 教科書の検定(～平成18年8月)
 - となると平成20年くらいからなら…

実際には？

- 教員研修の問題(担当者の養成)
 - 英語圏からのALT増は実質的にのぞめない
- 時間割の問題
 - 総合的な学習の時間から1時間をとる？
 - 総合的な学習の時間を設定した背景がある
 - 総合的な学習の時間(教育課程課)
 - (国際教育課)「英語が使える日本人構想」
 - 積極的な解釈 教科内総合へ
- 依然として教科化する(ため)のデータを必要としている

人的リソースの不足

■ 担当者の問題

- ALTの増加は望めない
 - 予算的な問題、JETプログラムの応募者も減少
- 教師の役割を再考
 - 重要なHRTの役割:子どもが一番よくわかっている存在
 - 韓国は、小学校教員の研修
- 教師間のコラボレーション、ALT-HRT-JTE、クラスや学校を超えた教師間のネットワーク作成
- 大学やセンター(構想中)による人材派遣
- 教師の英語力向上について
 - Classroom English、ALTとのコミュニケーションに必要なレベル

物理的リソースの不足

- 教材、教具に理論的意味づけをしていく
 - なぜ、それをそう使うのか？
- 教材
 - 身近なもの、暮らしのヒント、ひもを使って(高橋先生)、教材会社を儲けさせる必要はない
 - 歌、100曲以上を覚えてそれを活用する
 - 教師の中に歌シラバスがあってもよい(中学校では、文法等に基づいたものを作っている:中島先生)
 - 扱う語彙
 - 興味、知的好奇心、発達段階にそぐうもの(中学校とは異なる)
 - 例)かまきり、形、数字、

カリキュラムについて

- 子どもの発達段階をベース
 - 言語習得理論(研究)
 - 学校や、クラスの特徴
- マルチ(多)言語(文化)教育としての小学校英語活動
- SBCD (School-Based Curriculum Development)

(幼)・小・中・(高)・(大)一環

- 「英語が使える日本人」育成のための行動計画：
- 国民全体に求められる英語力 中学・高校での達成目標を設定。
 - ・ 中学校卒業段階：挨拶や応対等の平易な会話（同程度の読む・書く・聞く）ができる（卒業者の平均が英検3級程度。）。
 - ・ 高等学校卒業段階：日常の話題に関する通常の会話（同程度の読む・書く・聞く）ができる（高校卒業者の平均が英検準2級～2級程度。）。
- 国際社会に活躍する人材等に求められる英語力 各大学が、仕事で英語が使える人材を育成する観点から、達成目標を設定

義務教育段階(中学校)での目標設定

- それを実現するために、小学校、中学校で何ができるのかを創造する = バックワードプランニング
- 小学校で起こっていることから、中学校がどうつないでいくかを考える = ボトムアッププランニング
- 小学校、中学校の共通の意識改革(共通理解)研究協議会の設置
- 学区、校区レベルでの取り組み
- × 小学校・中学校・高等学校・大学教員の意識のずれとお互い非難のなすりつけ

- 小学校の英語をみて中学校の英語も変わらなきゃ。
 - School Based Curriculum Development
 - 構造, 文型の習得だけが表に出ない
 - Key Phraseを習得させるためにCA, TASKを作るのではなく, TASKをする上で必要なPhrasesという意識も(よりCommunicativeに)

小学校英語は

「英語の教育」か「英語教授」か？

- 金田(2003)の「英語の教育」と「英語教授」
 - 技能偏重の「英語教授」
 - 教育としての「英語の教育」
- 小学校英語の二つの側面
 - 「総合的な学習の時間」が思い出させてくれた「学校教育の中の英語」
 - 「言語習得研究」からの「早期英語教育」

本公開講座を通して

- 全体像の検討・認識：目的論から現状
- 実践例、実践者からの報告
 - 高学年で使える教材、テクニックの紹介
 - 教材としての文学の利用、カリキュラム創造のための理論など
- 参加者での問題点や改善点などを共有

因みに今行政から求められているもの

- 小学校英語をすることで何が変わったのかを明らかにすること。 たとえば…
 - 子どもに関して
 - 子どもの英語力、コミュニケーション力、Self-esteem(自尊心)
 - 教師に関して
 - 教師の変容、教師集団のあり方、学校や校種を超えた関係、
 - 学校や社会に関して
 - 学校全体としての教育に対する取り組み、社会や保護者の変化

素朴な質問を考えてみましょう

- Q1. 早く始めれば英語はうまくなる？
 - Yes & No
 - クリティカルピリオドの存在
 - あるだろうけれども、日本の公立小学校という環境で絶対的にサポートする理論とはなりがたい。
- Q2. 中学校の授業のような小学校の授業
 - 中学校の授業ってどんな？
 - 評価のために覚えるのは×
 - 演繹的学習よりは、帰納的、経験的学習を

- Q3. 単語を中心に進めていったほうがいいのか？
 - 学年によって異なる
 - 小さなカタマリから組み合わせに
 - 必ずしも大人が考える難しいものが難しいとは限らない
 - 単語や表現の選択：生活(自分自身)に密着した表現を
- Q4. 高学年レベルの英語活動のあり方
 - ただの遊びではなくプロジェクト型の学習を
 - 午後の近藤先生の参考に

- Q5. 英語能力の多様な子どもたちにどう教えるか
 - プロジェクト形式のグループでの活動、タスクを取り入れていく。コラボレーション、教えあいが起こる。ZPDも生まれる。
- Q6. ESL幼児教材の利用について
 - 使い方の問題: 使えるものはどんどん使ってよい
 - 英語環境を創造するためには、好都合
- Q7. 小学校でのライティング活動について (文字指導)
 - 文字指導について
 - 文部科学省の指導は「導入しないで」>「使ったらどうなる？」
 - 文字指導の理由を考えるべき
 - こどもの表現したいという意味？ 教師の都合？ 塾？ テスト？
 - ピクチャーカードの下に書いておくと記憶に残りやすい？
 - 文字指導でなくても文字に触れることはできる。
 - フォニックス対ホールラングエッジ

■ Q8. 小学生に実践的にコミュニケーション能力を身につけさせるために必要なことは何か

- コミュニケーション(能力)とは何か？
- コミュニケーションに必要なものは？
 - 約束事 = 言語、文字、音声、社会的関係、ジェスチャーetc
 - > ひとつずつステップアップ的に教えていくことのできるものではない< 積み木というよりは、雪だるま的

■ Q9. 小学生の特徴を生かした教材・指導法

- 発達段階にあったもの(他教科の内容を参考に)、遊び的要素、繰り返し、意味のあるもの、身近なもの、

- Q10. どうすれば、英語活動で人間教育をできるのでしょうか(精神的にも成長できる活動にするために)
 - コミュニケーションへの意欲
 - 英語という言葉コードを変えることでの利点
 - 違うことへの容認
 - いわゆる異文化意識と、個人という異文化の認識
 - 活動の工夫(コラボレーションが求められるタスク)

■ Q11. ドリル繰り返しの意味

- 行動主義的: 子どもたちはパブロフの犬?
- 社会構成主義的: 親、教師の言葉をまねる

■ Q12. 評価の問題

- 評価 評定ではない。
- 評価 = 記述 = > ポートフォリオとして
- 英語力を測るものもあってもよいかも
 - 英語力は何かを考えよう
 - 英語活動でしたことに合った記述の仕方を
 - SOPA (Student Oral Proficiency Assessment)
 - 児童英検
 - TOEIC Bridge



毎日の講座、最後の時間に質問時間を用意します。

- 各講座で疑問に思ったこと、より詳しくお聞きになりたいことがあれば、配布する用紙にお書きください。